笠志船物語旁註

上冊下冊合

竺志船物語序

予少與平士觀友善。士觀長於予二十歲矣。回稱忘年交焉。每相會。講論經史。盲量詩文。時或及治道得失。人物臧否。未曾知其精國學也。後問論者之言。其於國學傳賀茂真淵之說。博洽精確。有青藍之譽焉。予悅吾友古有此博雅之人矣。阮而又

小汀氏藏書

聞之。其於和歌。豐艷高妙。不愧古之作者。與橘千蔭。唱大雅於浪東。風靡一時。聲名藉甚。後進之士。仰如山斗。予又悅吾友有此俊逸之人矣。既而又悅閑之真於和文。爾雅巧麗。獨步于詞林之間。先哲古人。後無來者。蓋今古一人也。予又大悅吾友有此一代之偉人。唯恨予於

國學。毫無知解。則予稱士觀。同于矮人觀場。隨人喝采耳。雖然。毛嬙西施。天下知其為姣麗之人矣。蘇秦張儀。天下知其為雄辯之士矣。莊周左史。天下知其為能文之人矣。顏淵曾子。天下知其為德行之士矣。與天下之人同其見。同其言。謂之公論。又況公論之正義。然則予之

稱士觀。謂之公正。亦可矣。若夫惡人之所好。人之所惡。啼人禍身者。古人所戒。予亦不敢也。士觀沒數年。其門人高田文儒。剞其師所著竺志船物語者。向予序於予。予閱之。是世所謂物語者。而彼傳奇小說之數耳。是豈足鑒士觀之蘊乎。雖然。古人有言。嘗鼎一臠。全鼎可知也。

此編雖區區。亦足以窺文豪之錦心繡腸。裳為窠花嚼齏之筵乎。天下之人。自有眼識。又何假予之贅乎。文儒敏俊好學。務尚該博。閱覽不倦。能奉其師說。又一時之才人也。嗚呼士觀逝矣。人琴俱亡。韓公有言。思其人。事元實而不見。元實之所與者。則猶如元實焉。予之

於文儒云爾。

文化甲戌仲春甲子友人吉田
儒負加賀大田元貞才佐又撰

星池秦具馨書

眠帋鐫字

天下有瓌奇之才。能收瓌奇之事。著
為瓌奇之文。讀之可駭可哭可快可
笑可恨。至使人捫腕嘖飯咄咄不止。
作者之心非有七竅。目則橫而鼻則
豎矣。忽出此神通力。抑亦可畏也。史
記以跌宕之筆。簸弄今古。自是絶世
伎倆。但曰事生文。事猶在彼。至水滸
則一片腔子揑出無限瓌奇之事来。
文之與事。併両屬我。縱横變幻鞭馳

造化。雖正稗不同。工夫將倍古之人矣。

我邦古不乏麤藻。而搆靈之文別出新裁。才實足抗衡水滸者。唯源氏物語一書為然。其文波瀾蕩漾。雲騰山崩。筆底無復毫髮遺恨也。水滸以後稗史小說殆將充棟。吾讀深厭之。源氏以後物語草紙不下數家。吾亦不肯觀。近與高田文儒通交。文儒持竺志舩物語者来示曰。是平春海翁之遺文也。請一覽見序。余破格讀之。怳然自失。斃藻之絢。此豈在源氏之下乎。翁之在世。里居相接。然翁蒲柳善病。余亦衣走食奔。相見太罕矣。翁之於國學和歌。一時推為翹楚。吾亦不意其行文之妙至於如斯也。翁龍鍾一禿。對客如怯。而胸中所貯。奇々怪々。殆不可端倪。人之可畏。果然如此。初謂源氏以後

我邦無

奇書者。余之固執也。使余之固執立解者。文儒之賜也。今已拜賜。謹以奉還。甲戌暮春之初五山池桐孫題。

池永觀之書

そつのに打ちかけてあやめもてそえむら
れてうまいおしてもそうそうとうたれ
いとさえなるちいてこうふもありこれ
のやうなるこれのようたくるまとさ
をはえすつくめ侍もそつくきその
よやそたつぬ
文化十あまりひとせ三月

源光彪

那こその布施屋のたち。なるつるはよみおうく人ぶさえするそぶるもさで。その中まるのこちぶれ人は。美竹の世こ狂ぜ。演のままごと歌まるなむえたる」ものはあれぐ理ぶ非こ書素のこの性そてこのたとなすなつくよりて也。いとまのぶ

各宗各派の祖師の像を掛けて供養する人で
菩提寺の和尚を招いて
あるなら人を
そのようなものでもなければ
家の男女の
年忌まで
みな
えん命

各手ほどきをした人々で。
京屋岡の森女の孫娘。
あるなる人々。
そだのまり六。
家の男女人の仙女の六。
年ぜまでうぐいすもなほみ
みつくるよう。
えと企及まじ。

しは。
のくら」そもく文
神代より清はあるべし。
さへく漢文
はるまなもの
帝国で学なる
なほ
おもひのさ

露帝之移制。祭文。祝文。なるかなるや
こゝろの理。上書者牌奏疏。書記。論說。

國議。辨解。釋稱。相對。序。小序。題跋。古讀。
文なるはいかなるこゝろをもつゝむの綸
を莊園ふるとつゝるもの空ふるより
りるゝ。ふるのゝ。ふるゝ。

なるは。左氏史漢のさまゝなり。
乖取捨。伊勢源氏物語なるは。
けぎ。也。蘭。
義也說はゝ。乞昔字治

あるはなべて
なぬまでぢ
さとぶるは
先つ祖
れ體
詔冊御礼詞
霊前ゟ移判
こゝゟ理上書

指遺などは戦ま集祝苑のようで
いつでもの。くまでもあるの歌のう
くてもづのするは多くてばなり
汁る」さまでくる文むはすぐる漢
ままるよう今ようか詞を
いな撃る揮てのすべるなるなの
事」おひ忘かる新ようたる人くと
汁焼そばえさでありへるれ

かくひの心得ようてあるつる所
そうくるのやうに云ふもそれるに一人もなし
かくうううるく論ずる人は弱み
多もえもそ拙

そむ称なるて。すぐ狂ものぞうく
あもなりもそまでは。よるなぞひ
。ぞう〳〵まるる
ゆる美なとして
えぐうる人う。
今はおおのなで
梁れ草えばぬで
競もそ本するれ

指遣などは戦国策説苑のごとく
つづ〻とのべくまでもなき事。
くさ〴〵とづゝるは多くてばなり
けるに」などまでとゝむるはすべて漢
雲まるみてなど今はまるけ詞を
なす撃る指てなのすべてなるなの
事」およびおもひ出たる人〻ども
け情などばえさ〻でありへなどわ

とのむ移なるて。すべて程ものぞ〻〻
あもなりもそ〻なうけまてはよのをぞひ
はらつゞるあゞず門帝美なくて
まゐまり忘ゐまゐさ〻ら人〻う。
その先をひそ。今はおもはのなゞ
形そのわよ。句ゞ梁れ草えゞ動ぞ
競馬て本」るた人の動ゐれ

凡例

此書はもと大井三位物語と名づけられて。
ただ一条といふ人一の巻をもちゐその名なるをもて。
それと巻おさへて捨(ステ)られ。それのなかばやごそれ
巻の名もそうはぢこうあるとりなるをもて。
ようそ次の巻ようそとおもひて。はがくふの傳奇小
説の書例(ならひ)より。且聽下回分解(しかいぶんかい)とあるようにて。
なんあるをけふ。
はぢめ巻端(かしら)より。竺志船物語。東都。平春海士觀遺搞。源
與清文儒旁註と出つるをいつくより竹取。宇津保。
伊勢。源氏。などすべての物語(モガタリブミ)より例なきのなるをば。
世人の議論もいとかしなんさてば與清の

そのことばのそらは、師の名をもはぶくよし。
きらふ人ありてゆるしぜんまぜなくてそぎさりされどもおもなれば今うはよまかにのみ。巻首に作

俳諧哥論ゝ論一ともいてるい万葉集の
郡の都夜古都夜古のを
語ともそれを載て同集ま石もて
つき破ぶり利とあるを例ありて都夜古
ともいひ極めい体言と用言との差別を
もあ故くそのう仮名ゝ
都ぐうとい
都という
もうべなれども、ここは物部某なうぶ
都こいくるをこめぬ
もそてこぎそまま東
都と郡とい對ふる
又都と郡とい對ふる

凡例一

太宰府を西都といひ、鎌倉を東都といひ、
例あるうう人ゝ国府のるを
ここのの證ゝ据ゝ京都を西都とはいまで
なれど、江戸を東都とこんふるもあるをそゝ
しきよう、まろが著せ俳諧歌論十の巻ゝ論ゝ
たれど、こゝろゝいそ。
余が旁註ゝ後ゝ
をもそゝてんやなどいひそぎせ人ありゝ
うど、ふるき世のもあるぶ標註
ふでずさぶなるものをいとぐゝげゝ標註ま
でやいとそやさぬ、旁註ざともえうなきさぶゝ仮
ゝまなびのとぐゝなどよさひめて

えどのことばのさまは、師の名をもはばからずよみ人あり名をもしるしべせんもべなくてそのきさうされどおほくは出るかと西蕃(カラクニ)よりおこなくくるごとなれば今うねよまかびうともなてふたんがくたのもしくも巻首よ作者の名をもせず例あきさなるもどやく浪世よなりて名をかくせしまたそなし中國(ミクニ)ともいとやき芸さもそてあらめ今よなりてはほいなといのべし、もの序跋あどくそふるへいみもさくあらまよすめもそうなるかべさるぐうひまきのまくそつふぐさをやまく東都といくるをこれもとめ浦るくありばよいまうへいぶしさやもうべなれどこは物部某なるぐあさる例をうるよあくぐい

あくく太宰府を西都といひ鎌倉を東都といひ例あるぐうくよ国府のつをこまこのかの證(アカシ)よ据(ヨコリ)しくくく京都を西都とはあまでくれど江戸を東都とこもしきよくはまろが著せしたれだこころへいそべ余(マロ)が旁註(カタヘガキ)せしよなのほるすたらぬさ海あまべ標註(カシラガキ)をもそくてんやなどいひそべせしくくよ人ありしくどいとふるき世の虫(つミ)もあくぐまのあさり師乃そでずさべなくものをいとことぐくげよ標註ましでやいとそやらぬ旁註ざるもえうなきさまぞよ似ることでそうひまなびのとものくなどよこひめて

んもそろそこごてさ
書中んとそぬる字(モジ)を
いぶ〳〵さおぬ〳〵あるべ〳〵たくばあんえ

上事るく〳〵言も心もそろうみ〳〵やん
ろえ無止事一の家るろう諍み〳〵俗み云をても
おうわをといふさみえそんの重畳の
あるもいろう又上字を約よりていやと
祈るうや

さていやごとなの略なまでんもうえう
きをもてそぶきさ清水氏ハ不得已(ルエヤムコヲ)の義之と
もいひされどさぞくまろが況めて
おり〳〵ろきるよをとの〳〵とくる語ハ面向(オモムカシ)のんな
きそだ奥(オツ)のおり〳〵あべきよ〳〵お居氏ハいひ〳〵の

凡例二

といま端(ヒタ)のをり〳〵用(ヒタ)〳〵は蜻蛉(カゲロフ)日記のみちのく
ちのおく〳〵はまそてアまく〳〵うべいのよきくべれをの〳〵
かくまく〳〵といふ哥よ。兵(オカ)よよろけるをもて證(アカシ)と
せるわ〳〵師説よのまる。

源與清識

んもさるものこゝろをもちせゝ。
書中んとゝもぬる字を、ゝゝ刑もせゝ。世人は
いぶゝゝおゝもぬゝゝあるぐゝたゝくばあんゝ
よかんゝといふ語はあるゝの音便なればる
ゞふのゝてかなゝゝぐんゞを添ゝり。やごとなき
といふ語は無止事ともまゝ無悩ともいへる舊説う
けごゝろゝれど。余が考へて無上事の義とさごめり。
さてはいやごとなきの略なるべんゞえうな
きをもてそぶきさゝゝ清水氏は不得已の義と
もいひされどさるべくもあらぬが況めて也ゝゝ
おゝろきるをもとゝいへる語は面向のんな
きぞ。奥のおゝゞ也ゝゝ。お居氏はいひゝゝの

凡例二

といま端のをゞゞ用ゝは。蜻蛉日記のみちのく
ちのおゝゝはまてゝまゝゝいのよきゞれをの
かゝまゝといふ哥よ。兵よよろけるをもて證と
せゝゝ師説よりまさる。

源與清識

はくち　私
氏も亦京にて、大井ぢ之住といふ人いまそ
こゝりけり、ものゝ賢　こゝろよのびやか
おろ劣　秘たることのこゝろふかう、物しりたまひてまじめ無
まぢこ十まはたらぬほどなれど、さ縁乃
かこまて、家相損ふさとく人おそ秘べ、世をおこば
えやごと上事無なく、ゆくすえいとたのもしう人も
こゝろよせまゐらせ給ひたぐひとつあやし怪
みやまひ病あまて、酒をぞこゝろ人まゐ、

おほやけごと（公）
なまひごとのこと（飲興）
はうはうごころも（現心）
このごろ（間）
なきことをも（言出）
おほくのまひでき（舉止）
なりゆくおとど（無）
さだうかうこと（過）
まちともおもほさで（荒）

ろくぢうろう（上）よきころ〳〵めして、もらいを
さそふことこのそんたまのほどきをりなれど（咎）（無禮）（醉）
ひよのりたるわざとはいへど、ここの男の（乘）（階）
なをそこうす秩て、このくまでまもぐるまは（物）（狂）
しきふもほひやるあれいとやそこのら
ぬことなろうとて、やごのてほとのさとろとされ（職）
たる秩たまひぬそれよるとのちは世ぢ中
あぢきなう（無情）おぼ〳〵なりて、ね大納
それときよるをはろうろるみさうぢ大井（莊）

まあるにもとよりかりそめ乍なるを。
つくろふそんさせ給ひてこそありおはしまさめ世ぢ（籠居）
まぢりもたのづしうおもふべき人ぞ今ぐらぢあるこ（至）
ひなきことゝもやるのこおぼさるゝ。
（寶）
ゆ方ハこのう（王家統）どほりまそ、やごとなきさまぢよおい
されどいこのなをすこせまのみろくん。おなぢ（宿世）（祇）
さほよ酒をもふのくこのこのひろり。
こぢふろりめきおろよ。そのこ四はまぢさいふて（最）
きびとるほどこそ。女ごこと〳〵すめよなり（稚）

なへて。世姫君かくち世ようそぐれてあるぬ不
貌
なく。よろづつよさどうおりてきのなくく
聡　量
いでさまよことももちぐてんらひ人ははと
出　無　仕　有　意　異
なり。又きのはんおきてまめやそのよおしち立
遠　慮　押
たくとあるにおもやうなれどうぐくぐ女
性
しくおほとめのきもてつけきまひてさく
損
すぐいさるかくなどふつゆえさまひずく又
過
君のあけくれぐ酒れふちふづこ入てこひ
沈　泥
ちのごくまのきおさきはうあげ
嘆

かくきことにおもひつづけなまひてごのくち方で
このまきせぬよものをひさぶらよやめたまま
切
つとまは侍らねど。あまりよおつぎきてこゐる
絶
まなう　おいさば。おもらぬ法師をも引いでき世
間　無
なひぬ。ひねよりちおきのんこと
日　起
そかくらめてはのるぐよさめのんん
醒
をりあらまうびなどばくいさめのをりも
諫
あれど。あれさうなのまひそ。なの一人も
終　勿
いよちのぶる薬なきことそいひつまく今ハ
命　言

世の中もまづ
交
こゝつ捨ぐ
徒然
よなの〳〵まゝこのばゝはんゆくうもつでいぐ
さうぐ〳〵このまゝ
寂々
いひなちまゝお父ゑやいきゝめんさゝ
新夕なゝれのこゝよつけてもいさゝこのはゝて
ろよたぐ〳〵とおぼもめればあなぐちよう
不背
ちのゝ〳〵てはもどきはゝえのゝぐくもあゝべ。
庆
かゝて年度のゆくまゝよゝで猪のゝとう
五

らんことをのこいてこなゝのゝふんでんのさうじ
営
寝殿
障子
ゝよ。かゝゝやまゝこの酒よ名きゝゝゝる人ゝを
ゑこのゝせのひて。ゝゝよこゝぞのゝよ。世人ゝと
立言
ともたゝをれ。我ゝ友ゝよとゝゝ〳〵このゝべゝもこひ
之
の酒つゝるはあゝぐ。わこの世ゝるかゝてゝれり
居
生涯
とのゝゝゝひて。いゝ〳〵人のなゝうゝも。大佐の大
躍
納ゝをゝこにゝひたまへば。その酒をほゝゝる
讃
旅人卿
ゝのをゝめでゝまゝのまゝをひろめて。
長歌ひとつ

いみじの
かーときくのくさーつそ
むべもいひけり 宜 号
おばきはそ〳〵一つきを 繁 尚
そふるおそう 添
うきふみより 憂
まよとうもそび
おのづの〳〵
まさきくて 又 更
二つきこつき
のそれ後ハ 飲
よどむなく 無 泥
むすばる 結
おもひもとけぬ 解
むねもさるけぬ 胸
うちとけて 晴
こと〳〵さし 裂
ほりまこと
あ〳〵れおも
かくのごのも
ひごもといひて 仰
ひごもこと 聖
こころたのおと 大臣
ハ年おいて 老
ましぬれバ 致仕
さもさうすれつ
いともふと〳〵
あおぎ〳〵めや
十つきとをきう
あめつちも
のごうこと
きのふといひ
われ〳〵廣く
ハそれ月の
あけさ思ふぞ
あ〳〵れおも
日と夜と 昵 日と夜と 昵 野言し
たゞ〳〵 期ごり の言ふ

いつくの
ひきよきを
これをも
ほとゝぎす
あやめぐさ
かくてきくのくさ
ひじりもと
なせば
おのづから
二つきこつき
よどゝなく
むすぼゝる
うちとけぬ
清酒
聖
訪
憂
尚
寛
無泥
結
晴
宜号
愛
可憐
添
塚
解
胸

十つきも七ほき
あめつちも
のどゝかに
ひるよなく
夜
裂
書こほり
さもさうすれつ
ひじりもと
ふるさとの
聖
大臣
老
仰
致仕

乃へうたてまつるんの活ころまでよろづ
奉
ものまつりごとをもよきくまうしたはぬぞ。
政 凡 申
よろづ病よことよせてこもりてのみおはすれば。
託
今ハ世の中のすべて右乃おとゞの治ろるまゝ
自 由
なり。此おとゞいとうるはしき若
伝の君とおもなどて師をとりのひて。ふみなど
書
よろこのふことをもそろとも諸共
ものひぬれぞいとうるさき中らひなるを。
好
そハ活ヲ刃れさこのえたなくぶ人なくおはするよ

活けてもこの君のおくり世よろづもきてのみおぼ
埋
すをいとほしうおぼしなげきて。ことよ
労 事
ふれてハ老よろのめ給ふなどもの神など。
佼 約
年ごろかくヲ刃を世よなきものよなり給れ
バ母こそん安きこころ思ひなり給て今ハ
多をうらやむこころも給ふなどいとのひ
苔
てすゞくしうそびのらぬをとこと
清々
つゝれそちかけるれバ。いのでけ君をとおぼ
太宰 帥 闕
して活門まへされよきよそうし給ん。
奏

ぢ〳〵をもたてく、ヲ（立）
をゞのでいくぞ〳〵（起）
のはんよそむで
言ちよさう（寂々）
よりはゞねやうなる世をくてつぎ〳〵き月日（賑）
をおくりむのへんこそいとこひあるよばち
待〳〵あとそ小方もよろこびてまひてうち〳〵
よをはんまうけなどになるを姫君にひとる
はんゆのぬやうそおくをあるさゝ往生（空）

浅ましくも今さうなるをひとぞ〳〵（切）世を
おもひさてくまゝあるまで
きこえとそゝゐびくあ
びこたびこそあ〳〵（説）らくせこそ
よりかくせちよのてまひこをゝ人のはこて
ろをもまぐぞこのほよ（切）（顔）
はのうてんあきこゝまでをのこ世よ（男子）
あ〳〵おのれをる人あ〳〵ざ〳〵そう（立）
よゐぎでつゐもとよ
蓬萬（下）むな〳〵くちもそめぐろ（空）
朽果志

説

切

男子

立

朽果志

空

起

賑

いくでもつゞくべきやうをもおもふべし

都をふりすてゝ千里
こゝをとんぼそくおぼつかなのやとて浮宕
なぐさめのくばそろゝの海にそゝなう
とをもはあそりそなれずともるゝれそまつ
らんよ伴行うきさるれ憂
活身れ世よ出のんまこ時そりて
きすぢそいとう最
つやをうゝびおひ嬉
ハえあるまゝ作
願

んのうちよりおもひつゞけ侍るとて
なみだ涙ぐむ舎
なよのはこゝろなんおもひつゞけ侍るとて
物おもふ
のこまくばの女の身とてかるゝれ忌々
てもまねび出んかゝいきぶれ端
ど一ふり侍えまるすべそもこゝ此度
のはたらさおほことのずやうれ受領
るすせまきこゝひとゝそこのこ職
狭

別
諸
官
上

まてちるひてよろづのことをふさねものゝ執總
まはおほくの人くにくてゝ一ふことそなびきな
るべきを、酒このみ魔
まはそもきまゝ
てこのよくゝたゞひ従
ゆくりなくは男せ
もいでまうでこず意
れ波風たゞこのなゝびとゝいふなるをゝ車
ゐるんはよ、例のことひぢのやうまもおゝさば泥

いそぐ〳〵のりんそよりかゝく叱泣ゝゝとめ淫止
たまつゝゝそあゝめそゝとゞめたまふざゝん
まはゞはゝさゝ職辞
まゐるべきがゝこゝ
はんいとゝなのき無暇世をゝ凌
山のまゝをとゞりゝ帳
とねゝて、雲をくゝ汲
ゝゝゝ

くりぶさぐれどおとこ
がくくなんぐ又このこ
ここそあまぐさけこと
て、思ひとぐまりて
なりてとくまの秘
先まのうまうし
ままのり給へ、おと
りのひてのほんおきて
給えのひて、又もの

おぼ〳〵いぐ、かこと
二のう夜酒くこのう
ぬ君の姫君の
れず、まゐてか
の事ば、例のやう
ほこと話まうけあり
帯とが、きほこと
もう、姫君ぬ
ほそ一くぐり、

このよんべてなりのひて。とくくだりのこのひなど
までよ。ろくども（徐）あまるこのづけ（童）（下人）あのつきよ
ばりのひぬ。おとど（大臣）。年比のほいこるへてうとて
よろこびなひて。よべいとろろんまもひさり（昨夜）（試）（強）
ご。ゑひてれ後もうくてあるさはまもあくぬ
を。酒皃ういひて。世のくれあさはうくうり（別様）
なすこそ。物いひさなきうざるれ。貴いさも（悪）
こそうくてなりつくめ。今いあくあひ（別様）
ぬめれば。ろれやすくとそのひくれ。

年ごとよ秋のさごの雪のそ花んよいでくもた（出立）
まんどごくいくそぐりあんの庭いそぎよま（下向）
ぎれておぼくそもたるこのなる秋ざとて小真
そぐのくあへば。姫君をもつくねて。ひと川（撩）
清事よそいでのくり。夕このげをのきほど（連）
よそでさ海ぐのそ花どもれ雪のようちこざれ（可憐）
たる中をど。里べうやこまひとそおいうまま。
清経（きよつね）朝臣（あそん）。萩の花一枝をせめひて。

御役の

童 下人
ぬひて。てゝハ下づこのひなど
纏頭
つけ。あつきよ
本意
手比のほいこゝろとて
試 強
ろ見ようひとり
夜
ゐるさほうもあゝぬ
別様
世のくれあさほゝうとう
悪
さゞなきごとざゝれ。貧いさも
つゝめ。今ハあゝゝゝ強ひ
ろやすゝとそのひ久れ。

出立
たゝぬを。まこのへりあんは
高
ぞ。これ秋ごとて小夜
連
ねて。ひとり
可憐
きほど
花どもれ
ようちそゞれ
やこゝひとそゐうま。
秋の花一枝をゝせひて。

御役のめ一又ハ多ゝゆをゝるん

そもそも君、
まろもまん秋をちぎることぶ
たもとほせそ秋萩が花づまを花の風ま
なびくをこんなるひて、小のこと、
初を花なるよはねくらん秋のよとみ
つそつべきわでぶ
一本さけると、姫君、
秋は雲のちぐさ
やさしやいとでひとりこんこのさ

十二

むしれねなどこもものひて、これるほで
おさす、聲
ぶ活稲まわこれつげをんとそ、ひ
ぶ活稲よまうで活ることりのよ、私
なこのるるこころ、そばもちもちは
どろこのへば、師の夫れ活ゆめよ、父を親て
れ物うまりげあるさほてうそ多へぶ、
などてさいおうするそとゆそのへど、なそこの
活いくもりて、活まよまるまへる者て、

法皇もれさせらるゝよしきこえ
らんとてよめるへバ。

あら汐荒こゝろゆるすれ大舟はま左右
このごろともなよゝのむべき。とあり。こ
たび揖ふな語よおもむきなんとするを法
んそくのんとてのよたゝんとおぼして。
法んやをりおとふとす拙バ。海表(わだ)の
この程うちなれたる。おとこふとはめさめぬ。
水方よもかくとつげのひて。もろともに法

十三

師をねんごのよへ。あけぬれバ。法師ぞ(等)
物なとこのつけ(纏頭)のひて。頭陀(ずだ)ねんごろよせ
させるより八月はいこちの日。山峰までお
くりのよくる。法よそ(粧)
ほひいといとのめし。おくりれくるまは皆
ものこのつけのひてなんくゝのひる。右の
おとゞよりも法使あり。かりそめれゆきひ(行通)
おとろおもよおろ。すぎいるんほと廿五と
路
皆ハ今よりまちどほくくそおもひのへ
待
遠

らくらし。こゝろ秋いわたりて。旦の
秋のあさ。ぎり。れ絵をほこりまとも。
ぬさ（幣）ろくろの清んでく。なるべく。
そらはぐ。浴こぎさなき。ゆのん日も
八重九汐汲よくもむけよくせよ。ことまるんをと
あるま。

つくれ海老なそそ（舟著為）なべ先つげん
やく乃汐汲八そくこのたりとも。そ（惜）きもの
こそこそ。狩ゆくま。のこぐもたのこみそのよ

ことまやこのなり。清夜こ酒なとのひそきぬ
このばけのくり。撮塵身ハそちれ清くぐうま
ちうけて。あ（饗）くのもること（喧）いとく（甚）。ゐ
日ごろふりて。毎いぶにべくもなくねば此月
をそくよやすくひのひて。はんもげうこそく（下）
だりのいめ。時まは（静）ちつけのひて名そる清
の月をもろんのいでやいるさせのんとて日く
よなにくれと。海（味）もれどもとりはど（聚）
て。清酒すめまゐ。師の老い姫夫の清

いさめをうけすれもらぢつゝもこゝにへてそへ
諫
るそひのあやまちしーものべくもあゝぢとて在
酔
おとぐれよろこびのまひくるるをそそりきて
魂
ものへ独ぎかゞぐくよほんつまーうて一日ふつ
悼
このほどいるそひしれものべくのへぬを。
癡
つまぢくとふりそ
連々 雨降
月をこのきもものへべ。おのぼゝ法んおこそりざる
懈
なるこゝか。ここよろぐりものひてこそよろづれ
おほやけごともそべらめ。旅路のほどよへさの
公 事

そはくまーうちものべきるるそば。はくて
悼
ろなぐさめものへべきこと。小方のまぢるひものへべ。いつゝこと
懈
はんゆるひそくこ。今る日ゝよこひぢ死やうよ
妨
のそぞおそゝくふるはくまあゝよそち
新 師
のくぢりものふときてぐしもゝ。かゝ
喪
ものまちきこゆるよ。まーて右れおとぐの光
威
さへそひるひぬれぎ。人こと死おのるこおほ
ゝなゝぢ。こそびい再活ようと笠て。例なき

事なくれど。げん（監）ごのもとよりことにはも
こんの母まねくにて。かぢとり舟人どもを。物よ
こころねさるこぎりをえこらえて。ふなやうさ
などこおろうおあり。れ帳びやうぶ（屏風）などまで
きよろうよてうど（調）して。まもれり。なごやかよる。ま
おろうまねれる舟どもも。おれど。なぎさ（波激）
まはなぎて。ふ舟出をぞ待なる。ゑやうく
それまあ（繫）ぬれば。吐ひまにこそ。ふ舟とく出さ（疾）
せぬいめ。吐月をゆのこころさぶめなう待遠

ばこゆこひめいでば。あかくまぐ（暴風）せなどいで待
らんもそろりごこと。雑波の舟人どもせち（切猶豫）
まうせば。そちけ夫きこのひて。かくていつまで
も居一待るとも。ふるれのをきるは
かぎりえ待ごと。舟人らもいそぎ待るとき
けば。今いまりくぶり待ままとのこば。
私もそさりなるを。まづやさこひ話
ひて。さやくき（清）漕（邊）月をふらんぜくれ（覽）
んこそきよう（興）あるこばよ待ためふたので

いそぎ仕るべき毎人のつねとて仕れば、さもさも
清んなおりせ（懐）ぬひそ。この外つゝの毎人こそ。
とほくことなる（異）ゆきこのひゝ仕れば毎風
のんをもよくうつ（通）のでひなれて仕るべゝ。かれ
らぶおもふこゝろを（候）もとひこゝろを仕るんとそ。
守旅業の毎人をよびて。いつでおもふとゞ
ぎげよなうのの毎人のいひ仕るごとく。月
ハ毎風さぐめなう仕るめれば。それまふ毎
出ゝのんハこゝわりなるやうまハ仕稗ど。

そハ一日二日ハ母ハ
ごぜのふもとまでハ
すぐさまでハいくりが
こづめ海のんをさざ
清母出ときおそき
せなごし。たとへ
つのんざよか
ろおきなるまでハ
色きなれバ。守よろこびて。つくれ

（過）（到）（豫）（速）（遲）（賢）（保）（衆）

そこの（如此）なんまうけといへば。師の夫子のひて。
さゝぶそう毎人どものまうけるまれあるり（面）
きこのんとて。皆るおまへこめてまたおだ〳〵（前）（檻）
そこよみざり（脇行）いでく事れやうとひのみなふ（様）
この毎人らまゆうちひそめて。あなこと。（眉）（甚）（恐）
よく毎のりするものハ。日こそりをてはう〳〵（撰）（失）
なハざんやうよするをこそ。けこる毎の（長）
まとはいひるなれ。たく毎人のこころ（賢）
こう作りとも。ろこのちくふかぎりあり。（觴）（擢）（力）

海のんさそうがこいでう活風をば
（倭）なのごり作んとていこあやつてとおる〳〵
笈ふの毎人うちもひてんおこれ（危）（臆）
人こちこれ波山をうごう風いそほをとバ（揺）（巖）（飛）
すごりまり作りとも。かぢとられんひとり
つて。活毎ハたひ〳〵まあ〳〵とべ〳〵。いで（在）
こまもろこふさこそ。その（勿論）のまでこせ
のみとも。われこ活ともつうまつらんまゝ。（供）
なよごろ作んとていとわしぶほなれバ。（慢）

君が住吉の岸のおきつなぎ
なりぬるかなや
臆
ものどもの作色
そひそひて各
うなりともいひごとれいまら
ろこそもで友
こづつのりん乗
よもうつまつれる昵
のうてほく近
ほくの住吉の岸とも人へ皆なよいの

毎年まぐそ
守よろこ
ごとすこは
しきんやり
色
あいだ多く
おもてはぐ
れ食
住吉の敷
すぐれほのう
簗

猶豫
四方
集
里
金
多
掩

るとでめひて、ぜんぞやう打そそして、
かりれおまし（御座）そつ〳〵ひてあのゞ守まう
けの物どもみたな（荷造）ひいでゞ、へゞとうなづ、
ふりまし〳〵るどもかくりいづもし〳〵わま
の中納それゞもほ〳〵（藻塩垂）とわびのひ（侘）
くるすゝろゞこの（野篁）関のあるこゝろそより
さゝでさひわく（渡）る計ちかき（近）ほどゝ又た（小）
このむろれ宰おれゞさまでゞれゆくとよを
弥ゝゞやゞて（出）うた毎そめのくるをり

れるまなんそそよひめ〳〵ちのなどりわを
れず、あまびとさゞづ（海人語）るもそれこの葉をゞひそ
はゝそて侍るゞさゞれどおほやけのかこまり
にうて、はう〳〵なくなる人くなれゞせよさゞう
へてあれなるたゞ〳〵そいひてゞ侍れ、
それもゝ引のへて、せよいでゞはよあひるひて、
法力のひとりそひめくるたまりよかくやすう（逢）（出）（逗）
ひとゞゞそよりしてゞあまれてるも書をゝそ
什物のめいぼく（目）（海人）ゞまいひ侍へゞゞめとの人ゞ

いのでその名をきゝ人こゝろまなぶ（准列）
ばゝん、てびきさゝのえ（栄）てびいおとろふるも。（衰）
これ事杖ありとゝなけばゝ（浮沉）
いとゞくもゝのゝびゝでゝゝやらぬ人こゝろ
名ゝゝて杵をゝゝれゝこよひくまうと（朽）（真人）
我と、ゞ此なぎ氏の月よゝのこゝれゝるもゝぼうり（浮宕）（去）
芝うつなばおなゝもゝゝがゝりとゝゝ
（秘）なり侍ゝめ。
あゝゝがゝ月を昔ゝのことゝとゝてゝゞ（記念）

よ今をゝのびゞゝんとゝぐめん海ゝの月をバゝの世ゝまのゝよ秋
侍ゝん。

そ雪ゝもゝ海ゝ月をゝて光を
なゝゝよゝかゞゝとゝぞゝるゝおゞゝとゝのゝゝえ
ゝおぼえ侍ゝねといふ法華よりもゝゝ（童）
ゝていゝゝ世のふ、
沖つ舟とゝゝるやまのぞゝ救さゝもさや
このよゝ海ゝる秋のよゝ月。

もほやくぶりもとてびたりゆく
酒肴あまも月やめづらん。活東北窓
邊
活ごちなどそれもありつゝんを。なほもとゝ
等
わびいそびに。更ぬときよりめづれば。老いとき興
さらばきたびくとゝめて。家園を忘却してとおすべて。例の
諷
なそのうなるのこと。無量飲侍
はこのきなるづくりのことえんんもなけきび。
對飲得
旨もひこうじて。杉傳岩ごとくれあどよより
困靠

ふせるを。まろんのひて。いつひなきものどもも
伏
これ。こぞやある。汝杯をまゐらんとのゝどは
誰
こゝに笑ゆるんもおれば。うちとゝひのひ
て。ふでつあまんなりとも。ことよひるなるを
樵夫海士
ぞあゝん。酒くまうでてよとのゝへば。早もるひとゝるが
參來
んの給ふをきゝて。いこのでは。んをとゝんとて。
健
かゝらもこげなゞゝおまんまいでゝ。こゝう
つゝれ毎人どもの侍るをめいでゝ。汝杯
疾

しまうつくばいのうえとうんなりとそ
めしのみ。毎人どもを。好有
召
うづくまるを。守まもるのなるすあごの赤
いとめづらなるあぜれの侍るを。名つき
字
るるれよしきこめて。洗ひまうくばい
きようあるうぶざうよこ。奇
與有事
れことやいのなるを名ぶぞとのの人ぶ守まもり
よべぶ。かこはりておまんよいでくるけだ
ちうるくて。ふつうこのうえ。丈立
太
肥
雄

さはよととてうんのみこ。
すぐれ侍る。千人引之石
石投取
とる計よとりなし侍れぶ。然
侍るとのくばめざはきちうかとて。洗ひ
眼冷
まうるつぎよいでれるくやせほそりてかさ
瘦
ちさくやこのなりこそ。
此
小
そあくぶ。刃の眉いとやてうこのうえて。いさこの
柔
なるものくひまようもいでみるりんのまな
間
れぶ。いこちまろとうくり。かぶち貝いめあくく。
鰤鼠磨
眼赤

かくすそぎふえそぎ（烏脛）むねのさゝいでくれば
烏もねといひ、このゝ
といふ、皆つぎ〳〵（次々）
くるよう〳〵を笑ひめでいとめづ〳〵このなる
ものどもうれ、まろさきよいまう〳〵（往）らを（雨）（等）
つまごども、かくきそ（輿）ひのけざり〳〵とて
海のそまで〳〵（唯）ひのくよけめば、夫もはけ〳〵と
きそひのへど、よひ（競）
初夜

後なれば、えやは（不堪）ぬらん、いつ〳〵と法こと（聲）
づくひのあやめもわ（理）のはず、ちゐさ（起居）法こと
海うせずなりて、（蛭子）
えのこ、夫もいこ
いでこう、夫ひめ
る夫よおほ（御）
守はんごう〳〵
ぬときこゆひて、法華（寝）
のへべさぶ〳〵人
後なれば、えやは（不堪）ぬらん、いつ〳〵と法こと（聲）
づくひのあやめもわ（理）のはず、ちゐさ（起居）法こと
海うせずなりて、（蛭子）
えのこ、夫もいこ
いでこう、夫ひめ
る夫よおほ（御）
守はんごう〳〵
ぬときこゆひて、法華（寝）
のへべさぶ〳〵人

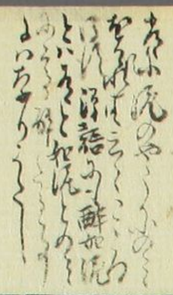
いだきてかきおこ（抱）
かくぎはよまろび（轉）
ふれのみ身をほど（惑）
まつらんとおもひ
ふしこそよろ
なれつうまい（馴）
うつ（我）なんやと
のぐで活をねな（茵）

活事よそまつる。
さそくやのてい
活字八十文字（カズ）
のごろも活事（膝）
うつてよろぼ（音）
たるまよ（帰）
ねよをりもそ
姫君をほのと（幽）
るかち人も（容貌）

むらうおもひくしてをのべでおもひぐさ
そふこころ（隨心裏）ひとついねもやまずまも見ぬ恋のこおぼえてそ一かへる人
をねまーこのばいのちをもそーまで。
などおもひつづけくるべ、なずー（准）ひなーぬ牙
れ秋そめーらぬ。ふきぐさ（悪）ころきぐさちーこるまで風もさだまりてそ波
れそちるもおぐー（擬）ふとてくぐりの
穿ち毎後の法まうけなるべきものなるべ

ところでたきやうなる壺十あまりよ
き酒どもみてーまねーせてり。海のおもて
たひらかなるに出ねば。法毎いとおそ（遅）し。六日づりへて。やうやく生ふ（うまご）いでし
里、追風吹いでん日をまちてこそ法毎はいでさめとて。毎人どもいりとりおろして（経）
ここよやすーくり。げ（休）ふ（錠）ばかりの山ぬのぞきもの（實）
よりふこのうちもてわたりてそ。んもなでさこ。
おれづーまぎるべきみ毛にるをぼられで（曲）

おもて
なし。
君
屈
欲
とふ
とも
出
のこ
ひと
ぞ
なし
のふ
まこ
やつ
れ
北
毎人
ども
も。
朝廷
傾
あり
せて。
いの
ごの
浮
とこ
ろを
あら
ひて
ぞ
酒
純友
さこ
この
よ。
年
ごろ
ある
ごと
捿
この
めら
れて
溺
かく
しも
のび
たる
を。
さら
に
更
これ
ぞ。
毎人
となり
て
学
よあり
みる
なり
経



くり。さるはみふねを人のひごろ
盗
もてれど。活いまそほひいのめくひのさ
頻
まる師乃活毎出なしねば。まづめさ世を
威
德
このろめしるふるまひなどもひうけざり
嚴
茂
しをあまれ活とも人をさきでせめひ
て。そは活毎よさぶふ人も救おほこぶ。
君ありよこひちのやうよのこおそすれば。
泥
おのばふあなづりうおもひなりて。
輕
そのびよあひかこひろ。純友ころ
視
志

ざ〜とげて。関白なども いそ〜んせさせ給ふ
まよ〜ひ（迷）わざ〜たとへ ふひろ〜とも。
受（ず）ひよりふく〜ざ〜ま（不可）すとも。あへなくは
う〜なく 舞（舞）とて。かく（下）ろ〜とる わざよ（無業）
をしづめさてんこそ こちをし〜ぞれ。かゝらん
よりは。ぬを人とて人よめをそびめらるゝと
も。宮ざこそ はまし〜うぞ。まさんゆくこぼち
なざ〜なく〜ん。皆ろひろ〜さんはをを
まちて。物〜てんやなどいひあく（合）り。師匠

君は此毎人どもれ。こくもむく（狡）つきんあり
とをおぼ〜もよ〜ぬるなればん手と
けてのこるて〜ぬくり。一日ひねもすのさく
らの ひて。さもく〜ふ ひてよひよりうちふる秋ぞ
毎人どもこよひこそといてぞ ふりくびし
うちかぶけて。かれ〜ろひふ〜ぞれども。
ひやうだやう（仗兵）おほくぐ〜（具）ぞれば。まきいでん
人あ〜んは。いとまあや（危）き。ものびいりて。もの

せんよ。戸口かな（彼方）
秘そ。いのでせんとそ
生てこれすることやう
ほそきこゑあきてそ
入て。今人（とねりざるべん）陸多ら（寝方）
よせてある弓（寄立有）
どもうごひとりて。つま戸お（放）ひきていで
（棄）ま。かそはんや
そ〳〵れとそ。私の（き）
こそ〳〵れちて。この（固）
を。毎こそりて（挙）
人〳〵よもひて。あん
一つづ〳〵さ〳〵（不然）
宮もわちとんこと
さりもあ〳〵まで（不可令有）
はさせよ。なう〳〵（忽失）
そ〳〵法ま〳〵なりとそ。居う
さとこいれば。毎（入）
颯

（触鼠磨）
（慢傍）
（太刀）
（殺）
（互劣優）
（諾）
（寝疾覚）

ふとおどろきて、あやしやはま戸のほそ
不圖 驚 奇怪
ひとそとちいづるをよくよくみて、くやしや
立 彼奴
おとれてさせそとふかぐちめそろはて、
音 勿 立 酸醤目
たちぬきそれもちてきれバのけざまよろぼれ
太刀 仰 倒
ぬ氏おとよ詰めさまーて油紙そそまさ
目
なれとそ、ねおびれ愕なぐーさそぎて矢
寢 覺
さなのうんとすれバ弓弦切なくそりたる力
中 絶
そのんとそもとむるまさにひとつごよな
無所 為
くそぞ、せんうなごまをつくりて
拙
三十

つぶんとするを、切きりさきれバ油おつごぞろ
逃 斬 墮 御 等
なきまどひて泣惑油紙いりまて活強多どる
きーれ倒りぬうへ上
くかぐおどろきておき歩のくバ舟人までて
起
ここぞれ入てごぞ乱御等
たち刀ぬきぬんとすれバかなぎ法もを
烏 脛
つよくとりて、かくおよせまおーするを、
傍 押 寄
ふりそなうんとすまひしまくどそやをみ
振 放 拒 身
動ろうせそそまつらんやごておごーまぐ
檻

ものようにろくもまよびりつけまゐらせて。
背　縛
姫君をもこころへよはなきぬ。わの君のおぢ
傍　恐
おそれるひて。小方は
懼
むねうちかきぐりよせて。ほくびをつよくくゝまき
胸　肘　縁　寄　頸　握
ねばそやくいきふきかよひて。小方こえなくう
絶　聲　戰
しなひて。わごのもとる。ことも皆ほんまよ
任
べ。いのちひとつ。あよせもの。あごの佛
命　吾
あごのほとけとのゝくべ。ほとぐ。ちうちわる
吾　佛　鉾　頭
ひて。法ごえいふまもさゝなり。法の命
愈　不

ごでや。ことで。ほとけ。
振　乎
賜
あるやとのゝまふるもよ。法むくろはふさ
段　體　兩
つなるかり。師は
をとんおこせるひて。さきよ父君は法
つげありしかど。
浮
告
をまろさゝにおもひよべど。あごがいさ
余　表示　吾兒　諫
めるもそぐばず。かくよこさなる波風
從
よ。家のうちこそぞりていのちをきこと。
挙　窮
なるわごのおこりてまいつの世まろめると
過

もれさでの里の名をばつゝんとて　いきづきつくる　嘆息
さゝ波といはゝ引もよりてあらやく　甚
わきてよりことよ、とく　無
よとて、おづ　まよ　檻
びいでつゝて、神のこゝろとほく　なげ　疾
やれば、波ぢぼと　鳴
なりて、法すぢ　海神
なえゞ、あれ　をのはゝとぢぼよ、まん世よ、
むーまよ　のひわゝりーをそ　領
まいあゝで、そ死世　水底
なぢゝみなそゝれいろ　鰭

そぢとゝそなのひゝろれ。姫君いこのあり
さゝをゝみのひて、そゝ　恥
よくゝなんとおぼーて、ちひて法身を　目
ふりさるちゝぢ、法神ほゝろびて法まゝつ　寛
ろぎぬ、やゝで法衣をすぢーいでく、法袴のこ　脱
まて身をなげ　投
かきいぢきてとぢめまゝすれば、むゝいなり。　無礼
まなふれて、とく　疾
多　觸
引法せなゝをゝ　殺
撮　撫
法
靜

なんぢ 汝 失 なひたてまつらんこころ
ありてかくもとぶめまゐするなりといへども
たてんなれぬまでびとよかくてもあらば 暫時 もうけ 掛
とぶむかいのちうへとて。おもひとするこ
をはるよおよ 更 とぶめまゐせて。あなうこ
そやまうせのふまで。とぶはもかくざるよ 西
もはころれまうそつうまはうめとて。
はるよおよびさうあてまゐりをればせん 守
このかれ 指 ゐなれまでざうよなぐうへのんいわづう 存

りきものうへいのちきえのんことうかさ 消 將 難
しやうではんれうちよいのようぶのうて
この 彼 かれ 目 めをぬまひて。とくもなんとおもひ 窺 死
つげのようはけてまゐおぼめぐうさてこと 計
そ。われさへ世よなうんまいかくようさるな 兼 横 車
るうよ。家うぞうりてうせぬとる治うう 拳
らん。あうまうきわうれいうよあひ 荒 海 神 怒
て。おぼうれうとのこ世れ人のいひてや 溺
やとなん。かくいうきあうさがうきをおき 甚 雖 敵

てうらさえさえきびらんとあるべうびたてれ
怨　果
ゐよむくいせぎうんするきつことおもり。みさを
罪　重　操
をけがし一ぶつよさえちおうんもぼよとりてハずぶ
穢　恥　負　欲
かうきこのさなぐぼやいのちなんことおてうべ
軽　遅
とねがひなりて。なぞやわれをころさず
拭　死　不　殺
らばわれぬまで。なぞやわれをころさず
とはおのがそとのべばまよろこびて皆人
を宴むさぼらんとえひるんをばおと
待れ。わるい者をはらひきよめまつらんとあまも
頻　起　為

こころをくでき仏るとて。やごてかきいだ
抱
きてれ帳（きちやう）のうちよいるをばこころをおさえて
のぞ。さいてはこころのうちのいのち
強
なくは男をまろせのおばこころのうちいの
無
ぢりこのありさんさるは菊（なぎ）よくさく花乃
枝よりもうそおぼゆるやいこちまろ
鼬　鼠　磨（ふさ）
くさもむろひて。これんのくこよひ毎（ふさ）もれ
祝
事

ひて。げにさるる事なりとて。母はうちのけぞの（織）
しきものどもかきやりひて。あまされ酒を（物）
どもとりいでく。おのく（拂）とひのくる。ほこぞ
しらえうちひそめて。くくふとのくなるひ（悄）
頭のひそ。牡ころおくべきことあり。姫君今（醉）（罵）（鉾）
さ毎もごころよはひのやうなるも。
いのでうはことれんなんなん。我もあけゆきて。
人めこえなんこよい。このおくべきことてみひ
ぬべし。もさもあらんは。つぐ（継）おほく

いり基て。ひこのうが（問）（勘）くなど。のごべきことば（辞）
なるらん。此のことばも。まをそらんよ。
種なのこそといつ（諺）
さもあることよとて。（分）（残）
人がこわばくるを。
ぬ。そのく（声）なんおも（作）
まりうなづきてわ（領）（状）
いまくことはんやさ（耳）（言）
もちてまさ（過）
持

ようすがありさまをとりんのひてさいつとれをところ
すがたかたち（形勢）いのちなんるよいをのをそ
ねどもそれをもいとせで身を
いそぐようなこころもちをもきあくびをせ（塞）
かなうもはんせきあくびをせ（喊噎）
よそとないのよ涙（泣）
ふほひの消ゆるほのほ（色）
いそぐそんよなまめ（艶）
おほそれんそもそ（狼）（持）

まづきさほのくるをとるようをまよで
らうたさのそまさうして（労）おとひそうしるも（慮）
うよふ（忘）ゆきんも（婀娜）なのおそ（恐）
れのひそ（猩）夫をびいうそ（多）
てまこのきいぐきそ（摟抱）ねぬ（寝）毎人どもは（太刀）姫君
をうなのひまるすそとそてまつよ（待）
ようさそよいでまず（家）祓やのるのねる（音）
このよ夕そて（家）もそやあけなんとすれば
なるつきで（屏語）ろひいのやうるをとうそよ（慕）

まどふらん。母も
迷
まさでぱ。皆人いとなる。あゝ汝よ。あひて。よ
ひろひ。底よもぢ。そてんも。もろがし。
尋
母もそおよやうなる。姿を。見ん。佐世。
さ〳〵も悔なる。やおよらん。わごともぐらなよ
輩
のよてごときゆうよてもろともにかゝき
緣 辛苦
めをばつゝん。いざおのづ〳〵なゝどもわちち
各 寶
とりて。祈をとゝかくさめとてゝこゝらとを
許多
なゝべくるこのゝ。ひつゞなゞひつゞなゝんれの調
並 唐 擔 長 擔 何 是 でう

ど
度ども。皆ひとづりいでゝ。まどとよふ
撰
ぢひて。ゆく〳〵もち秋ぞうせぬるれ
行方
ねよふとおどろこのされて。かくいひらぬ姿
不堪言
ぢちれさめごできよかぱ〳〵ひてかくは
心裏 覚 難
うつりぬるをを毎人どもいうよ思ふんと
おもへど。あれごもちよあゝかよとうなりそ
強 荒
まつんこゝえもおのひこのけぢそぱおひ
ゝづひなるぢさいへぐくれいさめごく。
諫
姫君死ぬくろの底いいのでうるぐまこ
知

害
秋ぶよ〳〵これまでのえ〳〵ことばかりあれ。
前
今はおよばぬ事をかいこと
不及
まて。法のおそれあ〳〵せでとほくおひ
叶
なりてもれをなくまつくまほとけ
勿
悲
どもさらにうけひかざるをそのて
事
なほまゐ〳〵ともくいのでうたがふ
強
らせてまつ〳〵ん。あゞ〳〵人のまようきを
生
憂
他

ふのりんよりはわれこそほとけ
魂
方
なれとて〳〵まつ〳〵め。あなおそろしや
果
とて法をうけ
片
端
頸
わなゝきてつよくひけばすゐち
経
ぬんまかるゝなり。とて
ひ〳〵きていでまてるまで毎人一人なく
あ〳〵でちやう
帳
なるものどもらうぐ〳〵ちち
蓋
打
毀
ふ引あきれてこゝろわれをいふのひなく
荒
言
詮

思ひてゐるこそくるしけれ。さればいづべせん。
和とりはなち（離）てやるこそ實もぞとのるとて。あれ（有乎）
ぞりうれどさるよ物一つでよなしこそ。
まつめるもの（纍物）ぞ。ひつれ底よおしへ（擂）
けるぞあるをとりてつれば。常なりこそは
るねぞいの（累代）宝となるもあんなりとも
いつめるもの（爲有）よれ。考の果なるべき。思ひ
ぞけぬあるこひ（價）をとそうべくれとおもひて。
ふところよあり（抑懐）てやごてこのふり立
（包）戟舸振

ふる。なりのとものづなきりすてもちて。さ（纜切放）
もさやこのなる。母をとちるれこのぎり舟
のそよあり（押遺）やれば。母を波よりでよひづ（漂出）
るをかへりてでうせで。あしとくあゆて。（顧足疾歩）
高ばこひしく、てうげさりぬこのそれ（傳逃）
うきこのれゆくへいづ（浮行方）
つぎれまそよこそ。

戒飭振

得

やごてこのふり立

擅

有乎

索

有

放

切

漂

出

足

疾

歩

光彫の序その多彩の版といふ
又一つ

題霧
錦箱元是錦為腸寫
出懇歎多一場淚痕遠
萬決遺恨親仇未報
此箱三
白石灘頭夜色姻孩

中好住月明時何問
一隊狂風起例生波
瀾東打船
酒狂為真酒義不
為女兒滴下淚來

我二碑十次
文化甲戌初夏詩佛
老人 大安
精舍

俳諧歌論　木屋高田兵三郎　前後編二十巻

前編十巻、分テ第三巻ヲ為ス上中下三本ニ、
後編十巻、共ニ二十二冊ニ、一二之巻
文化九年刻ス、三ノ之巻三本ハ今茲刻ス、

文化十一年歳次甲戌春二月

江戸梓行　須原屋茂兵衛

書林　京都　勝村治右衛門

大坂　大野木市兵衛

書高誠實

俳諧歌論

松屋高田先生著　前後編二十巻

前編十巻。分テ第三巻ヲ為ス上中下三本ニ。
後編十巻。共ニ二十二冊兵。一二之巻
文化九年刻ス。三ノ之巻三本ハ今茲刻ス。

文化十一年歳次甲戌春二月

書林　京都　勝村治右衛門
江戸梓行　須原屋茂兵衛
大坂　大野木市兵衛

俳諧歌論

松屋高田先生著

前編十巻。分テ第三巻ヲ為ス上中下三本ト。
後編十巻。共ニ二十二冊兵。一二之巻
文化九年刻ス。三ノ之巻三本ハ今茲刻ス。

文化十一年歳次甲戌春二月

書林　京都　勝村治右衛門
大坂　大野木市兵衛
江戸　梓行　須原屋茂兵衛